様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２３６８

研究課題名（和文）日本語焦点助詞の焦点との関連付け：意味論・語用論的アプローチ

研究課題名（英文）Focus Particles in Japanese and Association with Focus: A Semantic/Pragmatic Approach

研究代表者
田中　秀治（Tanaka, Hideharu）

三重大学・教養教育院・特任講師（教育担当）

研究者番号：９０７７９３８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語焦点助詞（も、は、さえ等）に関わる現象を分析する。本研究が特に論じるのは、焦点助詞はどのようにして焦点要素と関連づけられるのか（Kuroda 1965, Aoyagi 1998等）という問いである。この問いは、Kuroda (1965) 以来、重要な問いであり続けてきたが、現在に至るまで主に統語論的な観点からしかアプローチされてこなかった。本研究では、まず、統語論的アプローチが本当に妥当であるかを検証する。そして、関連付けの解釈的側面を考慮した上で、意味論・語用論的アプローチがより妥当であることを示し、提案された分析の経験的・理論的帰結を考察する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本語焦点助詞の「焦点との関連付け」という現象を意味論・語用論の観点から体系的に再考する取り組みである。よって、学術的には、これまで主に統語論の観点からしか分析されてこなかった「焦点との関連付け」の解釈的側面を理論化しているという点で意義がある。また、この理論化に伴って、本研究は日本語焦点助詞の意味内容や使用条件も正確に記述している。よって、社会的には、例えば日本語教育など焦点助詞を取り扱う教育現場において、学習者により正確な知識提供を可能にするという点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyze some phenomena involving focus particles in Japanese, such as mo, wa, and sae. It is particularly discussed how focus particles get associated with focused elements (e.g. Kuroda 1965, Aoyagi 1998). Since Kuroda (1965), this question has been an important issue, and only approached in terms of syntax. This study begins by addressing whether the syntactic approach is really tenable, and then argues that a semantic/pragmatic approach is more valid, because it naturally derives some interpretive properties of association with focus. This study concludes by considering what empirical and theoretical consequences its proposals carry.

研究分野：言語学

キーワード：日本語焦点助詞　焦点との関連付け　否定の作用域解釈　統語論　意味論　語用論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語の焦点助詞は、英語の also、only のような焦点副詞と同じように、「焦点との関連付け」という振る舞いを示す（cf. Jackendoff 1972、Rooth 1985 等）。すなわち、焦点助詞は「音韻的な主強勢を構造的に含むような焦点要素」と関連付けられながら、その要素に関わる代替命題を作り出す。先行研究では、この焦点との関連付けを決定する条件として、「C 統御条件」が広く仮定されてきた（Kuroda 1965、Aoyagi 1998、Kotani 2008 等）。つまり、「焦点助詞は、それが C 統御する焦点要素とのみ関連付けられる」という条件である。その一方で、Kuroda (1965) が指摘するように、関連付けが成功している場合でも、C 統御条件に違反している例がある。具体的には、焦点助詞が一見 C 統御していない焦点要素でも関連付けが成立する場合がある。このように焦点助詞が焦点要素を C 統御していない例に対して、Aoyagi (1998) は「焦点助詞が非顕在的移動によって焦点要素を C 統御できる位置まで移動する」という分析を提案している。例えば、追加助詞「も」は、時制主要部 T まで非顕在的に移動できると主張されるため、顕在的に C 統御していない焦点要素とも関連付けが行えると予測することができる。このように、焦点要素との関連付けは、「焦点助詞の非顕在的移動」を前提にした「C 統御条件」に基づくメカニズムとして捉えるのが、これまでの主流な分析として仮定されている（Kuroda 1965、Aoyagi 1998、Kotani 2008 等）。

２．研究の目的

本研究では、まず、焦点との関連付け問題に対して統語論的アプローチが妥当ではないということを示す。特に、焦点助詞の非顕在的移動の経験的不備を指摘し、焦点との関連付け問題に対して意味論・語用論的アプローチがより妥当であることを示す。よって、本研究の目的は、焦点助詞の意味論・語用論を、焦点との関連付け問題に対応できるレベルまで明示することである。

３．研究の方法

本研究では、統語論的アプローチが妥当ではないことを示すために、統語論的アプローチの下で「可能」と予測される関連付けパターンを検証し、その予測の一部が間違っていることを示す。具体的には、以下の三つの構造で関連付けが可能かどうかを検証する。

[1] 焦点助詞の顕在的位置が焦点要素を C 統御する場合、関連付けは可能か？
[2] 焦点助詞の顕在的位置が焦点要素に含まれる場合、関連付けは可能か？
[3] 焦点助詞の顕在的位置が焦点要素に含まれず C 統御もしない場合、関連付けは可能か？

[1]の関連付けは Downward Association、[2]の関連付けは Upward Association、[3]の関連付けは Sideward Association と呼べるパターンである。もし焦点助詞が非顕在的に移動できるなら、全ての関連付けパターンが可能と予測される。本研究では、[3]のパターンが不可能であることを指摘し、焦点助詞の非顕在的移動が誤った予測をすることを示す。また、この議論を通して、焦点助詞の非顕在的移動を前提にする C 統御条件にも経験的不備があることを示す。

４．研究成果

(1)　2018 年度は、焦点助詞の一つで追加の意味を表す「も」について、二つの問題に取り組んだ。一つ目は、「も」はどのように焦点との関連付けを行うのか。二つ目は、「も」はなぜ否定の作用域の下で解釈されえないのか。これらの問題は、先行研究では統語論的な説明が提案されてきた（一つ目については Kuroda 1965、Aoyagi 1998 等、二つ目については Hasegawa 2005、Miyagawa 2007 等）。しかし、本研究では、その説明の経験的不備を指摘し、かつ、意味論・語用論的な説明を提案した。その提案は、「も」の解釈メカニズムが「断定命題を含意するような代替命題」を作り出すという発想を形式化したもので、二つの問題に対して統一的なアプローチを可能にしている。以上の研究成果、特に一つ目の論考は、本研究の目的である「関連付け現象への統語論的アプローチの検証」と「意味論・語用論的アプローチの展開」を試みたものである。重要なことに、この試みの妥当性は、二つ目の論考で議論するように、別の異なる現象にも同様のメカニズムで説明を与えるという点で支持される。

(2)　2019 年度は、まず、焦点助詞の構成的意味論を可能にするための研究を行った。特に、その意味タイプを明らかにするために、事例研究として「名詞＋も」の意味タイプに関する分析を行った。この分析では、Kobuchi-Philip (2009, 2010) の「名詞＋もは、修飾子タイプ」という考え方に反論し、その代案として「名詞＋もは、量化子タイプ」という提案をしている。次に、焦点との関連付け問題に対する意味論・語用論的アプローチの更なる展開を目指して「焦点助詞の範疇横断性の問題」に一部取り組んだ。この問題は「焦点助詞はなぜ様々な統語範疇を一律に付加対象として許容できるのか」というものである。この問題に対しては、少なくとも二つのアプローチが提案されているが（Kuroda 1965、Rooth 1985）、その二つのアプローチはこれまで批判的な検証がされてこなかった。本研究では、それらのアプローチの経験的不備を指摘しており、また、本研究が提案してきた意味解釈メカニズムを維持しながら、焦点助詞の意味タイプの柔軟性を可能にする理論を一部提案した。

<引用文献>

① Aoyagi, Hiroshi. On the nature of particles in Japanese and its theoretical implications. Ph.D. dissertation, USC. 1998.

② Hasegawa, Nobuko. The EPP materialized first, Agree later: Wh-questions, subjects and *mo* ‘ also ’-phrases. *Scientific Approaches to Language* 4, 2005, 33-80.

③ Jackendoff, Ray. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge. 1972.

④ Kobuchi-Philip, Mana. Japanese *mo*: Universal, additive, and NPI. *Journal of Cognitive Science* 10, 2009, 173-194.

⑤ Kobuchi-Philip, Mana. Japanese *mo* ‘ also/even ’ and *shika* ‘ except for/only ’. *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 14, 2010, 219-236.

⑥ Kotani, Sachie. A mismatch between position and interpretation: Focus association with *even* in Japanese. *Toronto Working Papers in Linguistics* 28, 2008, 175-194.

⑦ Kuroda, S.-Y. Generative grammatical studies in the Japanese language. Ph.D. dissertation, MIT. 1965.

⑧ Miyagawa, Shigeru. Unifying agreement and agreementless languages. *Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics* 2, *MITWPL* 49, 2007, 201-236.

⑨ Rooth, Mats. Association with focus. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. 1985.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Hideharu Tanaka	４．巻 －
２．論文標題 Association with Focus in Japanese: An Event-based Postsuppositional Approach	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Proceedings of GLOW in Asia 12 & SICOGG 21	６．最初と最後の頁 517-526
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hideharu Tanaka	４．巻 19
２．論文標題 Japanese Focus Particles and Crosscategorial Semantics: A Preliminary Note	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Osaka University Papers in English Linguistics	６．最初と最後の頁 165-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hideharu Tanaka	４．巻 －
２．論文標題 A Note on Japanese Mo 'Also': Against the Modifier Hypothesis	５．発行年 2020年
３．雑誌名 英語学の深まり・英語学からの広がり	６．最初と最後の頁 168-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hideharu Tanaka	４．巻 55
２．論文標題 Japanese Mo ‘Also’: Anti-negative Scope and Stronger Alternatives	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of the Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Hideharu Tanaka
2．発表標題 Association with Focus in Japanese: Towards an Interpretivist Paradigm
3．学会等名 Semantics & Pragmatics Workshop at Mie University（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hideharu Tanaka
2．発表標題 Japanese Mo ’Also’: Anti-negative Scope and Inclusive Entailment
3．学会等名 Chicago Linguistic Society's 55th Annual Meeting（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Hideharu Tanaka
2．発表標題 Association with Focus in Japanese: An Event-based Postsuppositional Approach
3．学会等名 GLOW in Asia 12 & SICOGG 21 Joint Conference（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	澤田　治 (SAWADA Osamu)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	林　晋太郎 (HAYASHI Shintaro)		
研究協力者	菅原　彩加 (SUGAWARA Ayaka)		
研究協力者	伊藤　怜 (ITO Satoshi)		